

あいさつ

同窓会会長 高橋 優三

（昭和49年卒）



私達の母校、奈良医大は来年、創立80周年を迎えます。先人の不断の努力で、母校は中堅の医学部としての地位を固めています。入学して来た若者を責任ある医療を行える医師として世に出し、社会からの信託に応える事こそ、医科大学の使命であります。さらに、周囲の専門家から特段の言葉を持って評価されるような卓越人材が奈良医大出身である例に、皆様方は頻回に接しておられると思います。その意味でも、私達卒業生は母校に誇りを持つものであります。

その奈良医大がこれまでに歩んで来た道のりは、決して平坦ではありません。昭和30年代の終わりに、国立大学への移管が選択肢の一つになる程の苦境があり、それも不調に終わった事は母校の歴史の節目でした。歴史に「もし」や「たら」は無意味ですが、もしあの時、国立に移管されていたら、どうなったのでしょうか？

文部科学省は、国立大学医学部を旧帝大、特別扱い、旧六、新八、その他、新設医大に階級分けしています。この階級は予算配分等に厳密に適用され、必然的に各大学の格が決まります。旧帝大とは東大など7校です。旧六とは岡山大など戦前から医科大学であった大学です。旧帝大と旧六の間に特別扱いとして、東京医科歯科大と筑波大があります。最近になってこの階級に神戸大と広島大が加わりました。新八とは、戦争中の臨時医専で戦後廃止にならなかった医専を、各県に作られた新設大学に医学部として組み入れたもので、鳥取大など8校（現在は広島大が抜けて7校）があります。それに十数年遅れ、昭和30年代の終わりに国立に移管された医学部が、その他と分類され、岐阜大など4校（現在は神戸大が抜けて3校）です。もし奈良医大が国立移管されていたら、この階級に分類されるはずでした。結局、国立移管される事なく、県立として歩む苦難の道を選びましたが、今日の私達が目にする繁栄を迎えています。

それから60年経った現在、新八以下の国立大学医学部は、運営交付金の減額で難しい事態に直面しています。あの時国立移管された方が良かったのか、されなかった方が良かったのか、一概に言えない状況になりました。

運命とは、人の運命も大学の運命も、あまりにも皮肉で「わからないもの」と言わざるを得ません。母校の先生方は、運命に見放されても利他的な気持ちにならず、社会から与えられた自分の職務に誠心誠意、全力を尽くす事を継続したからこそ、現在の奈良医大の隆盛に繋がりました。創立80周年を次年度に控えた今日、関係者の皆様方の努力に敬意と謝意を表しますと共に、同窓会が果たすべき役割を模索いたしております。